台湾のコイン -- 党国体制からの緩やかな脱却 (特集 途上国とコイン)

著者	陳 計堯, 曾 文亮
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	215
ページ	12-13
発行年	2013-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003644

特集
途上国とコイン

台湾のコイン
―党国体制からの緩やかな脱却―

陳 計堯・曾 文亮

台湾は、一九四五年に日本の植民地から、中華民国によって接収された「台湾省」となった。一九四九年には中国国民党および同党が政権を掌握する中華民国政府の台湾への撤退を経験することとなった。このような経緯ゆえ、台湾は他の一般的な途上国とは異なり、いわゆる「独立建国」の過程を経てはいない。このような歴史を背景に、戦後の台湾における硬貨の発行は、国民党政権と分かちがたく結びつくこととなった。

●「台湾」コインの出現

第二次世界大戦後、台湾で初めて硬貨が発行されたのは一九四九年一二月のことである。この時発行されたのは、五角と一角の硬貨であり、その発行の目的は、悪性インフレによって暴落した貨幣の価値の立て直しにあった。そのためこれらの硬貨は米ドルとの兌換が保証されただけではなく、比較的高価な銀と銅を用いて鋳造されることとなった（写真1）。

当時、台北への首都移転の準備を進めていた国民党政府は、この戦後台湾初のコインのデザインとして、一方の面に中華民国の国父・孫文の肖像を、もう一方の面に台湾と澎湖島―すなわち台湾省―の地図を刻んだ。このデザインは、一九五〇年五月に発行された二角（アルミ製）でも用いられた。

写真1　1949年の伍角銀幣（筆者所蔵）

写真2　1970年版の5圓（筆者所蔵）

写真3　2001年版の20圓（筆者所蔵）

●「台湾省」から蒋介石へ

一九六〇年代以降、国民党政府は、中華民国が全中国を代表する正統な政権であるという政治イデオロギーを維持しつつ、台湾における統治を強化していった。そのなかで、コインのデザインにおける「台湾的要素」は次第に消されていくこととなった。たとえば、一九六二年発行の一元（＊硬貨上の表記は「圓」、以下同じ）硬貨のデザインでは、もはや台湾的なデザイン要素は用いられず、代わって「党国」「中国」と密接な関わりを持つ梅の花、胡蝶蘭のデザインが用いられることとなった。一九六七年には、五角（銅・亜鉛・ニッケル合金）、一角（アルミ・マグネシウム合金）のデザインが、宋美齢と関わりを持つ「美玲蘭」のデザインに改められた。一九七〇年に五元が発行された際には、初めて蒋介石の肖像が用いられた。以後、これが今日に至るまでの各種硬貨のデザインの主流となっている（写真2）。

一九九〇年代以降、台湾で民主化が進み、総統の直接選挙が行われるようになると、コインのデザインにも新たな側面が現れるようになった。蒋介石の肖像は依然として一元、五元、一〇元コインに用いられているが、民主化・本土化とともに台湾の国家としての性格が変化していくなかで、コインのデザインには蒋介石以外の要素も取り入れられるようになっていった。例えば一九九二年に初めて五〇元コインを発行した際には、梅の花のデザインが採用された。一九九六年、二〇〇二年の改版時には、総統府の建物と孫文の肖像がそれぞれ用いられた。また二〇〇一年に発行された二〇元硬貨では、台湾の先住民族に関わりのあるデザインが用いられた（写真3）。

●硬貨製造技術の停滞と革新

台湾のコインは、機械鋳造、縁

部分の研磨技術といった製造技術の面からみれば、第二次大戦後、さほど進歩を遂げていない。合金の成分といった面で若干の変化がみられる程度である。一九八八年にようやく縁部の偽造対策技術が開始され、一九九二年発行の五〇元コインから用いられるようになった。二〇〇一年からは、偽造対策のさらなる強化策として、隠し文字が使用されるようになり、以後多くの硬貨で採用されている。

このほか、戦後の台湾の流通硬貨では一貫して単一色が用いられてきたが、一九九六年に金と銀の二色を用いた五〇元コインが発行された。二〇〇一年発行の二〇元硬貨も同様に金銀二色であるが、これは人々の硬貨の使用習慣となじまず、広く流通するには至らなかった。その後、五〇元硬貨では、再び単一色が用いられるようになっている。

●材質とサイズの変化

戦後の台湾で流通してきたコインの寿命は、いずれも決して長いものではなかった。一九五〇年代初期には、インフレの進行によりコインを軽金属で鋳造せねばならなかった。前述の二角硬貨はアルミを用いていたし、一九五四年には五角銀貨が銅アルミ・ニッケル合金に、また一九五五年にはそれまで銅合金で鋳造していた一角もアルミ・マグネシウム合金に改められた。

硬貨と同額面の少額紙幣も依然として流通していたため、コインの使用機会は著しく狭められることとなった。コインは「角」を主な単位としていたが、一九六〇年代になるとインフレの影響を受けて、一元硬貨（一九六二年）、五元硬貨（一九七〇年）が発行されるようになった。前述の銅アルミ・ニッケル合金の五角硬貨とアルミ・マグネシウム合金の一角硬貨は、それぞれ一九七三年、一九七四年に鋳造停止となった。

インフレの影響はコインの大きさにも影響を及ぼした。一九八一年には五角硬貨が従来の二三ミリから一八ミリへと小型化され、材質も従来の銅・亜鉛・ニッケルから銅・亜鉛・錫へと改められた。またこの新しい五角硬貨も一九八八年には鋳造停止となった。従来の一元硬貨も一九八一年に改版され、それまでの二五ミリサイズから二〇ミリへと小型化され、材料も従来の銅ニッケル亜鉛から銅ニッケルアルミへと変更された。前述した五元硬貨も一九八一年に改版され、材料（銅ニッケル）に変わりはないものの、大きさは従来の二九ミリから二二ミリに改められた。

インフレのもうひとつの帰結として、コインの額面も徐々に高額化した。時代とともに紙幣の額面が高額化し、それにともなって補助貨幣であるコインの額面も上がっていった。前述した一九六〇年発行の一元硬貨と一九七〇年発行の五元硬貨は、いずれも一九八一年以後、同額の紙幣を代替することとなった。一九八一年にはじめて一〇元硬貨が発行され、一九九二年には五〇元硬貨が発行された。

●多元化する社会と硬貨

右で述べてきたように、この二〇年の間に、台湾の硬貨発行は新しい方向へと向かい始めている。一方で、新たな高額コインが次々と発行されることになり、新しいデザインを世に送り出すことが可能になった。他方で、一九九〇年代以降、記念硬貨が発行されるようになったことで、コインに新しい題材が出現した。この二つの変化はともに、コインの脱・蒋介石化を後押しする作用を持った。また、記念硬貨の発行は、人々のコイン収集への関心を高めることとなり、電子マネーの出現によって圧迫されるようになった造幣工場の経営状況の改善にも、部分的ながら貢献している。

台湾社会の民主化がさらに進むとともに、コインのデザインにはさらに新たな要素が加わることだろう。これは、戦後長らく国民党の「党国体制」のもとに置かれてきた台湾のコインの歴史を大きく書き換えていくものとなるだろう。

（Kaiyiu Chan／國立成功大學歷史學系副教授・Wenlian Tseng／中央研究院臺灣史研究所助研究員〔翻訳：川上桃子〕）

《参考文献》

①于宗先・于金利［一九九九］『台灣通貨膨脹』台北市：聯經出版事業公司。
②中央造幣廠開鑄七十週年特刊編輯委員會（編）［二〇〇三］『中央造幣廠開鑄七十週年』桃園縣龜山鄉：中央造幣廠。
③莊宏彬（編）［二〇〇五］『台灣錢幣目錄』高雄市：東南集郵社。